
学園黙示録-DEAD or ALIVE-

maria

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 -DEAD or ALIVE-

【Zコード】

N9477M

【作者名】

mari a

【あらすじ】

学園黙示録の一次創作

学園默示録を元に

桜満開の春。

俺みながわやまと、皆川大和は無事に高校三年生に進級。

決して優秀とは言えない頭で、何とか乗り越えた大きな壁。

それと共に俺に襲いかかってきたのは、受験生という名の重荷。

将来の夢なんてある訳のない俺の人生は、ちっぽけなものに違いない。

優れた才能がある訳でもない。

こんなどうしようもない人生を送る俺にとって今一番足りないものは『刺激』だ。

平凡で何ひとつ不自由のない生活。
俺には、それが退屈で仕方ない。

そんなことを簡単に言つてしまつたら、贅沢なように思われるかも
しないけれど。

「何か楽しいことねえかな…」

保健室のベッドで仰向けになりながらぼーっと天井を眺める。

所謂『現実逃避』。

このつまらなくて、平凡な生活に飽き飽きしてこらる上に面倒くさい
ことから逃げる。

都合がいいと言われたらそれまで。

俺は大きく息を吐くと勢いをつけて重たい体を起した。

真っ白な布団とカーテン。

「鞠川センセ、俺もういくわ」

「ええ？まだ授業終わってないわよ」

校医の鞠川静香先生。

健全な男子高校生としては、とても田のやり場に困るようなナイスバディ。

オマケにこの天然っぷり。

周りの男たちがほつとく訳がない。

その反面、俺はそこまで興味がない。

確かに魅力的ではあるけれど、それ以上に何かを抱くことはない。

「もう元気になつたから、じゃ」

一方的に話を押し切り、フラフラと保健室を後にすると授業中と同じあつて静かな廊下。

このまま教室に戻つても担任にしつこく問い合わせられるだけ。

授業が終わるまで時間を潰すか。

屋上で一眠りしちゃう

そう思い立つて歩き出した時だつた。

たまたま通りかかった人物。

ものすごい形相で走り去つて行つた。

あれは、後輩か？

見かけない顔だつた。

同じ学年ではないはずだから、少なくとも後輩に違いないのだが。

「同じく授業をサポートするヤツもいるんだな」

その時、戻づくはずがなかつた。

何が起きたようとしているか。

『終わり』が始まろうとしているなって

屋上につこて景色を眺めるでもなく、ドアを背にして座る。

もう、さすがに誰も来ないだろ？

気兼ねなく寝れる、と心底安心して目を閉じた時に異変が起きた。

「全校生徒・職員に連絡します！」

何とも騒がしい校内放送だった。

いつもと何かが違う。

それは明らかだった。

ただならぬ異変を感じた俺は、眉間にしわを寄せて耳を澄ました。

「現在校内で暴力事件が発生中です。生徒は職員の誘導に従つて直ちに避難してください！！」

まさか。

一瞬笑いが込み上げた。

何かの冗談か？ドッキリか？

そう思えた俺はまだ、呑氣でいられたんだ。

しかし、そんな俺を恐怖に導くのには十分な程の奇声が学校中に響いた。

「ギャアアアアアアアッ」

「おいおいおい…」

まるで、テレビや映画で見た残虐なシーンが浮かぶようなリアルな奇声。

当たり前だ、現実に起きているのだから。

俺は自然とその場に立ち、何を思い立つたのか無我夢中で教室を田指した。

その間にも、放送は途絶えない。

「あつ……助けてくれっ助けてくれっ、たすけっひいっ……痛い痛い痛い痛い！」

耳が痛くなる。
気も遠くなりそうだ。

俺は必死にただただ教室へ向かう。

こんなに全速力で走ったのは久しぶりなのではないだろうか。

「助けてっ死ぬっ……ぐわああああーーー！」

その言葉を最後に何も聞こえなくなった。

その途端、頭に過ぎつてほしくない言葉が浮かんできた。

死んだ。

怖いくらいの静寂。

俺は足を止めなかつた。

そう思っていた矢先、バックに陥った生徒たちが一気に廊下に押し寄せてきた。

-7-

「ଓ'স'ন' - - -」

卷之三

俺は流れに逆らひよつこして廊下を進み続け、やつとの思いで教室に着いた。

廊下から響く様々な声と足音。

外に逃げようとする皆のおかげであつという間に俺の視界に映る人影はない。

頼りにするべき教師がない。

始めからアテには、していない。

「…何だつてんだよ」

勿論、この時の俺は冷静さを失い校内放送の内容を鵜呑み。

だから暴力事件が起こつた、としか考えていなかつた。

それにしては、異常なのだ。
この光景が。

ふと足音が後ろからした。

敏感になつてゐる今の俺は、素早く反応して振り返つた。

「なんだ…お前か、びっくりさせんな」

振り返った先にあったのは、見慣れた姿。

「大和、授業サボつたてたろ？おかげで捜したよ…それよりマズイぞ」

曇った表情を見せたのは、同じクラスで仲の良い斎藤翔。さいとう かける

信頼を寄せているひとりだ。

しかしその翔の表情を見て、俺の嫌な予感が肥大していた。

ただの、暴力事件じゃない

「なあ、一体何が起こってる」

「お前を捜してる間に、嫌なものを見た。人が人を喰つてる」

まさか、そんなことが。

一度そう言われて誰が信じるものか。

「現実だぞ？ 有り得ないだろ…… 映画じゃあるまいし」

「外を見ればわかる」

翔は冷静だった。

俺は教師の窓からクラウンドの広がる外を見下ろした。

その途端、俺は息をのんだ。

なんだ、この光景は。

血が辺りに落ち、翔の言葉通りだった。
人が人を…喰つてやがる。

「俺たちも逃げないとヤバイぞ。とりあえず携帯は持て。いざとい
う時の為だ」

校則違反ながらも俺と翔は携帯を持っていたので、ポケットにしま
う。

俺はしばらぐの間、グラウンドの光景が頭から離れなかつた。

当たり前だ。

まるで、映画なのだ。

いや、映画よりもゲームだ。

視線を移した先に、クラスの野球部のヤツらのバッジが見えた。

野球のバッジをまさかこんな形で使うことになるなんて思つてもな
かつたな。

「翔、野球のバッジ」

誰のかわからないが、今の状況で躊躇つている場合ではない。

生きるか、死ぬか。

究極の選択を迫られているのだ。

俺の言つ『平凡で退屈な生活』はこの日を境にして、突如姿を消した。

* * * * *

「何処に逃げるんだ」

教室を去り、誰もいない廊下を一人で走る光景は異様なものだった。

静かすぎる

「外に逃げたいところだが、人が溢れ返ってるし危険だ」

「じゃあ…」

と言いかけた瞬間

「いやああああ…！痛い痛いっ！…！」

すぐ側で女子の叫び声と、聞き慣れない唸り声が響いた。

俺と翔は足を止めて、顔を見合せた。

廊下を曲がってすぐだ。

ここを曲がってしまったら。

「翔…！ヤバイ、逃げるぞ…！」

俺は見てしまった。

一瞬だけ、一瞬だけだった。

手を引きちぎられ、血にまみれた女子生徒を見てしまった。

人間に群がる得体の知れない化け物。

あれは、現実なのか

今思えば『刺激』が欲しいなんて軽率な発言をした自分に罰が下りたんじやないか。

そう捉えてしまってもおかしくはない。

俺は刺激を求めていた。

平凡で退屈な日々につとめりしていた。

だけど

俺と翔はその場を折り返し全力で廊下を走り抜けていた。

その間にも、静かだったはずの廊下や階段から聞こえる悲鳴が増えていた。

明らかに犠牲者が増えている。

喰われたヤツらは一体どうなる？

そもそも、化け物がどんどん増えている。

もしかして

俺の頭には、ありもしない予測が立てられ始めていた。

それはまさこ、映画やゲームの世界。

「大和！」

翔の呼びかけで我に返った俺の前に立ちはだかるのは、例の化け物。

肌は黒く、目は剥き出している。

首の肉がなく、血にまみれている。

数時間前まで普通に高校生として生活していたヤツが、途端にこんな姿に

今の俺たちに考へている暇はなかつた。

「…アタシがこなれちゃう」

金属バッドをこれでもかと振り上げ、力の限りに頭をかち割つてやつた。

俺の推測が正しければ、死んでいるヤツを殺すには頭を潰すしかないはずだ。

少なくともゲームでは、そうだった。

化け物が弾き飛ばされて廊下に投げ出され顔が原型を留めない程に潰れた。

見るに堪えない。

俺はすぐに田を逸らして、バッドに付いた血を払った。

「たぬ…たぬ」

極度の緊張からだろうか。

差ほど体力を使つたわけではないのに、息切れが激しい。

肩を大きく上下する。

初めて、人をバッドで殴つた。

初めてでなければ困るのだが。

でもやはり、気持ちいいものではない。
感触といい、余韻といい。

何とも言葉にできない。

「…大丈夫か」

「ああ、大丈夫だ。…化け物は人を喰う。喰われたヤツは化け物
になる」

「喰われたら、化け物になるのか」

「確信はできない。でもそうに違いない」

廊下から眺める外の光景を見れば、納得はできるはずだ。

化け物がどんどん増えてやがる。

こんなにも増殖している証拠だ。

「それに化け物は既に死んでる。死んでるヤツ相手に無駄な攻撃は効かない」

「死んでるヤツを倒すには……」

翔が言葉を濁らせた。

俺は、ふっと笑みを見せた。

「大丈夫だろ。足や手がなくても動いてるヤツだってさすがに頭がないや無理だ」

「頭を狙えってことか」

「映画や、ゲーム通りならな」

考えたくもなかつた。

この世が映画やゲーム通りの世界になってしまったところのことを。

しかし、簡単に受け入れられるような事実ではないのだ。

「おー、上から水が……」

翔の言葉で窓に田を向ける。

どうやら屋上から水が流れている。

火事か

?

可能性はある。

こんなパニックなんだ。
火事だつて起きる。

「いやあああああーー！」

また廊下にひとつつの叫び声が響き渡り、俺と翔は同時に田を移した。

数十メートル先に、座り込んでしまった女子生徒。

その近くには化け物もいる。

マズイ、あのままじゃ。

「おー、あれ…望月じゃ」

翔の言葉が発せられたと同時に俺は咄嗟に行動に出でいた。

「望月…!…伏せてる…。」

バッドを振り上げ頭を狙つ。

もうつかうしかないのだ。

俺達に躊躇いなんてあつてはならない。

「…この…やめやめ…」

鈍い音。

グチャツと生々しい音。

血が壁に飛び散り、俺も返り血を少しあびながらまだいる化け物に立ち向かう。

その時、背後に気配を感じた。

唸り声が近かつた。

しまった

ドンッ

ドアアップされた化け物の顔が歪み、動きが止まるとビサツと音を立てて倒れた。

「翔…助かった」

「前の奴らも…やるぞ」

残りは一体。
無我夢中だった。

何も考えずに、無心でバットを武器に立ち向かわなければならぬ奴らを相手にした。

も、何が現実なのか。

今は夢なのか。

そりであつてほしい。

そつ願う俺を裏切るよつに立て続けに起つるパニック。

「……も、いないな

氣づけば、転がる化け物。
数は四体。

俺と翔は息を上げながら慎重に辺りを見回しながら、息を付いた。

といあえず何とかは、なつた。

飛び散る血。

こんなの、現実で見るハメになるとほ。

血つて、こんななんのか。

「……望月、大丈夫か」

翔の言葉にビクッ と 反応しながら顔を上げる望月里緒。

クラスメートだ。

俺は望月と名前の名簿順が近かつた為、席が前後だった。

話したことには皆無だつたが、俺にとつて望月は特別な存在だつた。

座り込む望月は口を手で覆い隠して、信じられないと言つた表情で化け物を見た。

肩が震えている。

無理もない。

あと少しで死を目前としていたのだから。

「……望月」

かけてやる言葉が見つからない。

励ます」とも、絶望から救つてやる」ともできない。

俺たちにもそんな余裕はないからだ。

「あ……大丈夫、ありがと……」

そうは言つものの、とても大丈夫なよつには見えなかつた。

「望月、俺たちはここから逃げる。危険かもしれないけど……一緒に来るか?」

そう提案したのは翔だつた。

俺も勿論そのつもりだつた。

少しでも仲間を増やして、協力し合わなければ生きていけない。

そんな気がしてならなかつた。

「…………うそ、一緒に行く」

望月は大きな決断をしたように立ち上がり制服の汚れをはらつた。

「とつあえず慎重に行動だ。逃げられる時は走れ、無理に相手にす
る」とはない

俺の言葉に翔と望月は深く頷く。

そして、歩き出しかけとした時

「きやあああ……」

甲高い女の声。

「…………職員室だーー！」

声は近い。

俺たちは声のする方へと足を進めた。
生きてる人間を助ける為に。

走った先に職員室が見えた。

男と女がひとりに化け物が六体。

予想外の数に一瞬躊躇つ。

しかし、叫びを聞きつけた他の生徒たちも続々と姿を現した。

「おー、毒島……！」

見かけた姿。

鞠川センセと一緒にいるのは、同じクラスの毒島冴子。
（ふすじまさえこ）

それに後輩らしき男女も駆け付ける。

そのうちの男は、先程屋上に行く途中でそれ違った男だ。

「皆川に斎藤……里緒も

望月と毒島はどうやら仲がいいらしい。

俺達七人は皆、顔を合わせた。

「来るなああつ……」

ピンクの髪の女の叫び声とドリルが肉を裂く音が響く。

「俺たちひまつりをやる……」

「私は右の一匹をやる……」

「麗……」

「左を押さえるわ……」

「つおつやああああつ……」

「やああつ……」

「ぬい……」

ドドッ、バキッ、ダダダダ……

「つま もりあああーー！」

メキメキッ…バタツ

一瞬にして化け物が床に倒れた。
どつかひ、どうにかなつた。

「高城さんっ、大丈夫？」

モップの柄を槍代わりに使つて見事な槍術を駆使していた女が駆け寄る。

高城と呼ばれた女は返り血を浴びて全身に血が飛び散っている。

「みやもとお…」

顔を歪ませガタガタと震えている。

近くに転がる化け物の額には、ドリルによつて捩り掘られた穴があつた。

「皆川、斎藤、里緒。皆無事だったのか。本当に良かった」

毒島は笑顔を向けた。

「毒島も、鞠川センセも…良かつた」

今この状況で、生きている人間に会つ度にホッとしている気分になる。

出くわす殆どが化け物なのだ。

毒島は向き直る。

「鞠川校医は知っているな？わたしは毒島冴子。三年A組だ」

「小室孝、一年B組」

やつぱり屋上に行く時にすれ違った後輩だった。

小室孝…あいつは、校内放送で知らされる前に何かを知っていた？

あの形相は…間違いない。

「去年全国大会で優勝された毒島先輩ですよね！わたし槍術部の宮本麗です」

宮本麗：確かに宮本は俺たちとタメなはず。

留年になつたとか聞いたな。

それにしても槍術部とは。

だからか

「あえとびB組の平野」「一ータです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9477m/>

学園黙示録-DEAD or ALIVE-

2010年10月8日11時33分発行